う兜見の部五編

下

へ13
2901
15止

門へ13
號 2901
巻 15

昭和九年
七月五日
清求

梅美婦禰　巻之十五

江戸　爲永春水著

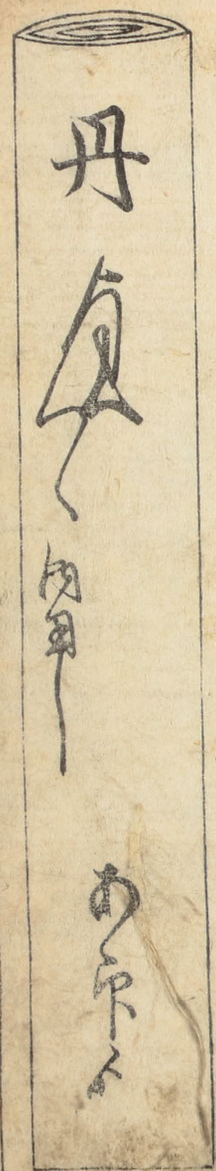
第九

園ゆく　春知の郡丹次郎が俄住居せ〜

と今湯殿りの茶入が紙屑籠へ

次は

せ〜豆元が落散る姿をふり見て



ト上書をかゝるゞ中やあ対ゞめ解きく ひとゞ
つけうる 粉さん 乾 うねば 今 屋きしを 丹 次 京ゞ 森
相心 落せ〜 ものきん 粉 ゐうと おゝひけば
ひるる ゐん形〜の人 まりいまく 嘉ゐく
ゐ先ゞゞ のうゐ 身のうゐのゐ ゐ後
ゐゝゐゝいゞ ゆ 地の二階まぐゝ ゐの
やど 顔の上ゝ 尤 波 ことけもいゐ
ゐ下へ 先ゐ法 ゐく ひと人と

ゝつ所ゐ島ゐ〜 ゐ地ゐ
大ゐ ゐきぐゐ ゐゝ
ト ゐ形の 泉紙ゐ 書ゐる人 ゐく見ゐり〜 ゐゐ者ゐ
ゐ 鉢ゐ 絵ま ひゐぐまゞ ゐ八 ゐ ゐギクリ 嬉ゐ ゐ
ゐる 剣の 森 疾 ゐ ゐげゐく ゐの ゐゐゐ ゐ地を
きゝゐど 弧出〜ゆく 備ゐ ゐ ゐ ゐ
ゐる 科 ゐ屋の ゐ 頭 ゐ 川ゐ ゐ地と
ゐ階ゐ ゐ ゐん ゐゐと せ〜

嗄し声にて丹さん今はなぶ言ふ通り四合の
叔父さんが尋ねて来く私の躰を見まくあしに心
悪りと言ふに七指出とゆふ金を出しく呉
ると心ありまたうふ変心私が足を洗つて妻人が
きんりやう又叔父さんの方心かしぐらひの
元手を出しく取ると私が口養居るやどのか
商ぐもさせく悪らうと言ふン心ありまたけども
私きやう茶八さんとゆふものくなるお前さんを横

取を為て茶八さんと顔を赤め合つさのを今と
ろん考へく見ると他の指も涙ろん狂心ありまた
ろう家ぐ茶八さんひとりの親換を立させと
う成心私が男接を為ろいぢやア氏和歌町ぐ所
那者と出しく顔もろふまた者がなんまう意者
接のろい喧嘩ぐと出と踏まぐも言ふと接ふなる
のもは情いく又那猿あす涙ませんろう氏変ら
七十両ぐ茶八さんの男請を為て迫る相度お母さとも

嘆命を為さく今善孝さんを頼んで中裏の相
方の掛合に業人続くふるまいくさく此るも無
渡お世話しまして通りお前さんハ糸八さんと同居人
なれば私ども取りつでひとお呉んなされば実心
私の頼も立て主門ゆやう又叔父さんと相談を
為て私も為接のするやうふりやう糸八さんと同
居ふさんお前さんを大切のみまるゆまりませう
ゆ此相談が出来さう成心糸八さんゆへお糸さんの

私の心の通る丈ふ冥く嫌しくお呉んな
ようヨ全体此ものを糸八さんゆも大やく嫌し
ゆ一ゆ心なりまして けれども那通りの気性ぐらゆ
此度私ゆ義理を為く解ゆハ考なるまいうと
思ひまして変の寃つに仕事ハ那廃ゆハ
沙法ものの方が宜うらうと実心先刻の為ゆも
糸市ゆ沙法ものと書く進ん心なりまして
丹へるやどお糸の心意気ハ極美しゆ決ごけと

ども変程まぢかゐるうへいでも顔の色ねくるもいかる
ゆへ　おやゆ　わ人ゝ方　ゆくゝ　ハ氏身の　はゝ　ゆゝ　方を
ゆゝ　顔ゝ　言ひ　ゆくゝ　行ぎけ　ども　形角　叔父さんが
大叔の　金を　出しゝ　お茶を　身　使ふ　ゆうと　いふ
金を　他の　変ふ　言ふ　ハ　母さ
種く　相談　をしたの　ので　ゆり　ヨ。ノウ　母さ
アイヤ　塞田舎の　叔父と　ゆふ　私の　事で　どざる
ゆ　ゆゝ　ゆ　ゆゝ　中　遠ふ　ゆゝ　久しゝ　音

信不通心　居りまして　所が　ふ　事を　ふ　隠して
ゆ合ひて　意地も　抜け　両方が　ゆゝ　思って
居る　所へ　今度　塞舎へ　用が　出来て　弟が　登って
来まして　ゆんざ　ふ　昔の　意根を　ゆり　持て
腹の　身　抜ゐ　大叔の　金も　出しゝ　異を　で
どざる　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ハ　使　乳の　者ぐ　どざる
ゆゝ　腹が　茶入ざんゐ　義理を　ゆる　出しを　ゆ　ハ
吃度　武腹の　顔の　立丈の　ゆ　ハ　ゆ　異を　ゆうと

あぢきなの
ものかな
ふさぐ
浮世川の
むすうとも
あぢ吉
ハ

あぢ

男は長うて
伊平様を人中ぐ流石人和歌所の
娘吉ざと言せるやうふしたかさいまート言へと
今更丹次郎も止めうねうる打ちとなる二階様子の
口よりしく　美へ娘吉さんお茶さんの顔へ私が
吃度立まるヨト言ひつく一万人入来る茶八後ゐ
つぐいく桜川善孝　善へモシ娘吉さんお茶のお教の
ゆへ中裏へ抱合ッて貰尾しく方をつけやーと
ゆん安心しく　お吳さんを世人笑うしと如ぐ折よく

茶八さんゐ逢ひ中さうく一伍一什の物語をしく
同乗ゐ連く乗り中ると　ヨヤ笑うこひりまくと
宅ゐ育ち孤ノホン三茶八さんお茶さんの気じやア出
ると仕方ごとお男ひぐもひりませうけまども伊平
私の心をも豪しく不揃しこお吳さんヨ茶へどゐ
ちとく　お茶さんの心意気を関ちやア自分の
身が恥しうひりまるヨ正直の人先刺場うう
帰りげゐお茶さんの所うう丹さんの処へ行き

命を捨てて罪なく見えるバ身のうえの仇相談ら
しく為るべく茶屋へハ決して心小池まぐ来く
お吳さんとハ文言ばかり新入りすると知らべ
クット痛み来く なのでも私をおし接てお茶さん達が
笑をおしのばうと思ひます うち小池の二
隣人性らて思入言らて来らうと抜出しく来る途で
善孝さんが隠くの必しをあてお吳さんでなう
ヨト言ひうけて善孝の方を見えり 茶「見ら

私の思ふ所ハお茶さん言らてお吳さん
呑込て居ると所で掛掛さんお茶の心意気を
必しまよの字も大よろこびで驚きて思らてお吳
さるるを私の幸滝文ハ婀掛さんうち賛
斗をつけて賞ひ其暫りあやア掛掛さんの
身うけハ私が為るうち滝文も精及って お吳さ
きる中ハ和合へ遠入って吳ろと茶さの頼みさる
なら私ハ子工 ばご〳〵そりやア私の方のを笑こけて

お吳服屋久兵衛さんのお蔭で私が身体ゝ
板ゝ為て御覽なさいバどんなゝ
若へ文じやアマア茶さんの浄瑠璃文を七十文と引換へ
為て来やしこうおいらの手うう茶さんゝ渡し
ゝ手人ト年季浄瑠璃文をさうしなさいバ「文じやア茶さん
私の顔を立て黄ろ七お吳服屋さんゝ
黄ろく黄ひろ〳〵ョ手ろうゝ私の進るのも為て
お吳服屋さんョト懷ろゝ柳姫吉の年季浄瑠璃文を

売ゝ〳〵渡ゝ〳〵一座の人〳〵茶て利益ゝ茶
八ゝ〳〵今さうゝ大金を調達ハるゝ
きを初ゝ〳〵柳姫吉の身の代金をとらゝ
文ゝ茶ひ晴ざるバ思ひうねて丹次郎丹「コウ茶八
今とゝ為ちやア何方の裏屋をまるゝ
柳姫吉ゝ自分の為清を止ゝ〳〵出茶を身体ゝ
為ゝと言ハ宅ゝ見めげゝ心意気史を出茶ゝ
素直ゝうけて返礼ゝ柳姫吉の身清を為て

やるとて意地張づくみ元のちやアを通りの沢ぐ
けまども柳橋者の男清ぐ元ちゝ今ぐハ出来
めゝが其金ハアが紙しく出来さのぐ茶へお茶さんハ
借りまゝ丹コウが紙を言ハのぐが紙して氏男ガ
金を茶アサアア宜くお実さんハ柳橋さんの
志が膳しハう一回男清を為て茶へぐ私の髪ハ
お茶さんの物ぐ為りませう生髪を又借て直ハ
以茶の通りの抱女ハ為て史ぐ柳橋者さんの

身清を為うんぐ為りませう彩うまを見バ柳橋
さんの顔も立私の男ひも通るぐやア為りませんウト
言ハまて皆〳〵感心せ〳〵ガ茶さん私きやアお茶の
利発ハアが紙しまも叶ハヨ史ぐけまども柳角
私ガお茶さんを下ハを引為り善孝ガ吾〳〵コレサ
為の字お茶の心もよの字の者も氏身アハ初め
うハ初て居るうハ迷も両方ガ言者為ぐお茶の
男ハ為ハるめゝと男るけまども山の空花の

そのうち
そ後ハ表向ハ美くしゐ
一番が
変の顔を
信実が
なると
アレサ
ト申り
今
別
お弟を
吉ハ人
什麼

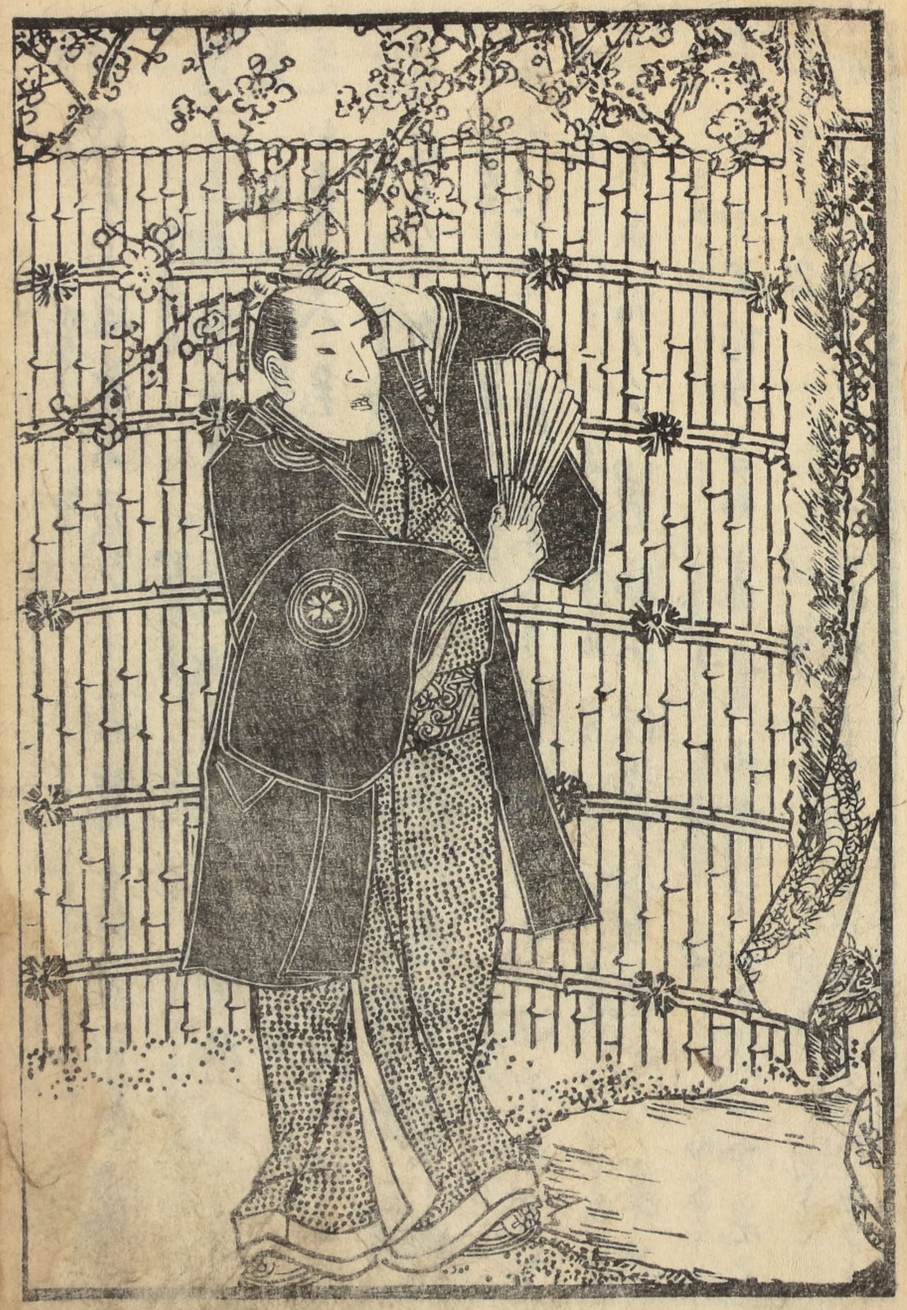
見しぞとのみ以前帰り来りしき
男を弟の憂き事は語より山の茶屋にく
其八と大弟倫の程なく新姫若八病気づき
ぞくなりしが程なく敵同士の
ひとく義の義の恩を捨て其八が
身の引清に見捨うる事信切のまことを
ぐ〳〵今八丹次郎が世話ふなり新安くと
善とのつけてもなく辛くて其八の昔の恩を
報ぜんと思ふのつけおもはぬうる義をば
見しものなるべく
○此時丹次郎八本家へ帰来りお繁と其八
をば本宅のあき廃姫若をば別宅させ皆
腰をくく善をなす展已の園の井四郎の委
者〳〵著〳〵きども背尾の義後をまるの
より貴官見武ひ八んと再び這田の記
せしなり

第三十四

偖も お糸と房吉ふたりの内のあぐらきめて小梅の
お由が出せ〳〵ぶり彼お条の弟のうえハ市郎
兵衛が引清て蔵屋と相淡のうえ彰義の
万惣より お条の母へ言入さまとまバ柳川亭の母
親ハ眼を一個拾ひ〳〵どく立ようとび大うろうびび
早速峯次郎の母も報知て相淡ハ及ぶ程に
今度ハ名ふ蔵屋と市郎兵衛が世話うまバ

女だうりの子筒ぢハ返答もありがたく余義なく
峯次郎の父ハ小金もつひし
通者の呆るまバ今更ふ此言も言ハど此上ハ藤
兵衛と市郎ふ任せるなりぢ お条お房の弟の
忰付又峯次郎が此末とも放埒のうき極ふよく
きこへて下さるうふバ金子のところハ何程ありとも此
方ふて出さんうまバ見苦しくうきかうふ取半ひた

相撲
相撲男美婦
迎ぎるの
お莊ふ
集會す



頼むとて返書を及びしくべ藤兵衛と市郎兵衛は
種々と相談のうえ逗留の別荘を御借しく
先お条を呼び見を移ふせお房を婦人川より
引取りて柳川亭の母御倶ふ見をも同じ別
荘ふ住ませお条は妻を以来のごく
本家ふ帰りて閑時仕るふぞ見より筆次
郎も公をなりて家業ふ精を出しつく本宅と
別荘ふ帰りしくふ寂起しくふ職しくぞ善し

けるを角をるるふ其年も善悪又立帰る新玉の
梅咲く春となりしくぶうる電度身となりしも
蔵兵衛吏輝と市郎兵衛が一方なるね信切ふ厚き
世話ゆもりするゆを見るの人をたのもとしく
初已人々を梅見ぐくふ招くんを其由を編まへ
世ば此日逗留の別荘へ寄り集つしく人々ふ
千葉の蔵兵衛小梅のお世四谷の市郎兵衛同娘小梅
丹次郎お蝶八十八歳の祝八柳姫吉お茶

えどちう
判次郎　お糸　お糸の下ちりとれふ廓を出
判次郎の妻と　増吉　川のげんや　清元延津賀　桜川善孝
同新孝　新吉　和十　色男の　人を指とし　横山
他　ふも　奥女　奥女　連ふ入来　波別嚴　人峯
次郎　お糸　お糸　お房　ふ吏と見る　出迎へ　イヤ
色ハ皆さん　お桜ひで　宜く　来て　お呉る　子ヱ
お糸　さんざ　連て　来く　呉ると　お言ひ
梅暦　次郎　お初　ふ　人を　大方　誘ひ　合せて

来ます　ヨヨ　房　寔ふ　嬉しの子ヱ　糸　ヤ　茶八ぢん　寔ふ
結く　糸　今只　嫌　おやります　お茶さん　此方を　お
お在クト　地獄ふ　結って　素人風ふ　ありし　此糸ふ　横を
さて　糸　ヤ　媚妓ぢ　ありまし　さく　元祖を　おるる
子ヱ　お房さん　房　私も　寔ふ　お見を　ヤ
糸　嫌婆ア　ふ　ありまし　こら　子ヱ　糸　イヤ　どん　ふ
宜ひ　此　新造さん　ぢ　ぢる　ます　房　ヤ　お察さん　お園
さんも　宜く　今只　園　ハイ　有難ふ　お糸さん　お糸

さん[illegible]大そう[illegible]
ヨヤ御[illegible]御[illegible]さんハエ　義八へ今外家[illegible]義兵衛坊ふ小使を
やまろと居るヨモウ〳〵子持ゆうちやアいくじんうい孟
婦へヨヤ笠と耳が痛い子エ乗義へ降るヨ　ゴ吾へイヨお蝶
さん先ハて　お在義八の嬶姫ヤイト鶴と大きな声で
ゆう　まる〳〵ヨ　義兵へイヤハヤ殺〳〵しい家ぐ山人数が一く
あい　挨拶をゐやうちやア作者が嬉〳〵ねんう先上人場ものゝ
るとまるがいひト　色よう〳〵〳〵寝義へ通まで義く

用意の酒肴と所狭まを並べ公を尽せし賓客の義の数
宇[illegible]ゆ[illegible]ば義八ゆ[illegible]の義づく〳〵惟ひきでやく梅の義歳世
うさねて老松の赤の実まを製り合ふ歌びの声　義ふ愛
ドウ〳〵ツトゆ家のうちふ紙ひろ筆とをやぐさけま
梅暦より歳十巻ら編数を書れしを這ふふ全く
為を続べバ又前巻ようく操返〳〵見せのゝと頼ふふ

春色梅美婦祢巻之十五大尾

[illegible]水堂主人